B-6

ノス彝語の指示詞について

沈宏（神戸市外国語大学大学院）

要旨：指示詞には外部照応的用法と内部照応的用法がある。外部照応的用法に関する研究には、指示中心から指示対象までの距離によって、どのように対立しているかが重要点の一つである。ノス彝語の指示詞に関して、従来の研究では、その点において認識が統一していない。本発表では、中国四川省西昌市佑君鎮鉄匠村で話されるノス彝語の指示詞における距離的対立している系列数と語用的機能について考察する。考察結果は以下の通り：（ア）鉄匠村彝語の場所指示詞には、thi^{55}、$a^{33}di^{55}$、$a^{33}di^{33}$ と $o^{21}a^{33}di^{33}$ の四つが用いられ、thi^{55} は近称であるが、後ろの三つは $a^{33}di^{55}$＜$a^{33}di^{33}$＜$o^{21}a^{33}di^{33}$ の順に遠方を指示する。（イ）ノス彝語の指示詞における距離的対立している系列の数は様態や程度＜物や人、時間＜場所という順に増えていく。（ウ）基本的な指示詞が名詞 $tɕo^{44}$ に続けられて場所を指示する場合、単純に近と遠を指すのではなく、「内側」と「外側」を指示している。（エ）前方照応用法において、近称の $tshɿ^{44}$ は主に当該談話（叙述）のトピックとなっている対象を指示し、遠称の $a^{33}dʑɿ^{44}$ は主に当該談話において主要なトピックでない対象を指示する。（オ）場所指示詞には方位詞が後続して具体の地名を修飾用法もあり、主に話し手の指示対象までの距離に対する主観的判断や強調を表す。

キーワード：ノス彝語、指示詞、距離的対立、トピック、主観的判断

0. 始めに

距離的意味は指示詞の中心的な意味であり（陳 2009：7）、指示の中心から指示対象までの距離によってどのように対立しているかは指示詞の研究においての重要点の一つである。ノス彝語（チベット＝ビルマ語派ロロ＝ビルマ語支）[1]の指示詞については、様々な文法書（陳ほか　1985、李・馬　1987、丁ほか　1990、張・蔡　1995、陳・巫　1998、Gerner　2013、陳 2016 など）によって記述されているが、その点において、認識が統一していない。そして、指示詞における語用的機能、特に内部照応的用法に関する記述は比較的少ないため、まだ不十分なところが残っている。本発表[2]は主として以下の三つの目的がある：（i）涼山彝族自治州西昌市佑君鎮の鉄匠村で話されるノス彝語の指示詞における距離的対立している系列数について考察する；（ii）指示詞における内部照応的用法を考察する；（iii）指示詞における非典型的（直接指示をしない）用法について考察する。

本発表の構成は以下の通り。１節では先行研究および問題点を紹介する。２節では指示対象を種類ごとにわけて考察し、鉄匠村のノス彝語では、距離的に対立している系列の数が様態や程度＜物や人、時間＜場所という順に増加し、儲・鄧（2003）及び劉・劉（2005）が提案した類型論的な傾向に従っていることを示す。3 節では、指示詞における内部照応的用法を考察し、$tshɿ^{44}$、$a^{33}dʑɿ^{44}$ における内部照応的用法における使い分けを明らかにする。4 節では場所指示詞における非典型的用法を考察し、話し手と聞き手の間で情報が共有している場所を指すことも可能であり、主に話し手の主観的判断や態度、強調を表すことを示す。５節は本発表の結論となる。

---

[1] 主に中国四川省涼山彝族自治州および周りの地域で約 350 万人の「ノス」と自称している彝族人によって話されている。形態的には孤立語的特徴が多くて、基本語順は SOV であると考えられる。研究者によっては、「彝語の北部方言」「涼山彝語」とも呼ばれている。

[2] 本発表で用いるノス彝語のデータは引用を明示したものを除いて、主として筆者の母語話者としての内省をもとにしている。

1.　先行研究および問題点

指示詞に関しては、狭義的定義と広義的定義がある[3]。ノス彝語の指示詞に関する従来の研究では、陳・巫（1998）を除き、すべて広義的定義で取り扱っている。ここでは代表的な陳ほか（1985）と Gerner（2013）について紹介していきたい。

1.1　陳ほか（1985）

陳ほか（1985：pp125-126）はノス彝語の指示詞に、基本的な指示詞 tshɿ^{44}、a^{33}dʑɿ^{44} と場所を指示する thi^{55}、a^{33}di^{55}、tshɿ^{21}tɕo^{21}、a^{21}tɕo^{21} と性質や状態、行動や程度を指示する ɕi^{21} があり、a^{33}di^{55} にはストレス（以下「`」で表示する）の付加とストレスが付いている助詞 o$^{21}$ の前接によって、`a^{33}di^{55}ko^{33}、o^{21}a^{33}di^{55}ko^{33} と `o^{21}a^{33}di^{55}ko^{33} の三つの指示詞が作られ、a^{33}di^{55} と共に四段階の遠方指示が作られると述べている。しかし、本発表で取り扱う鉄匠村で話されているノス彝語の指示詞は、陳ほか（1985）の記述と一致していないことが多い。そして、陳ほか（1985）は指示詞の用法に関してはほとんど記述していない。

1.2 Gerner（2013）

Gerner (2013: pp148-158)はノス彝語の指示詞における語用的機能について記述している。しかし、場所指示詞に関しては、「thi^{55}」と「a^{33}di^{55}」しか認めていない[4]。そして、内部照応的用法に関しては、さらなる分析の余地がある。そして、Gerner (2013)は統語的観点から場所を指示する指示詞を「副詞」に入れているが、それらの指示詞に関しては、方位詞が後続し、共に場所を指示する用法もある。

2.　指示詞における距離的対立する系列数

指示詞において距離的に対立している系列の数はいつも一致している訳ではなく、指示対象によって異なる可能性がある。本節ではノス彝語の指示詞について、指示対象を物や人、場所、様態や程度、行為と時間の順に、種類ごとに分けて考察する。

2.1 物や人

物や人を指示することは指示詞においてもっとも使用頻度の高い用法である。ノス彝語の指示詞においては、基本的な指示詞「tshɿ^{44}」に「a^{33}dʑɿ^{44}」が類別詞に後続して用いられ、それぞれ指示の中心の近く、あるいは遠くにあるものや人を指示する。

(1)

thɯ^{21}ʑɿ^{33}	tshɿ^{44}/ a^{33}dʑɿ^{44}	bu^{55}	kha^{44}di^{33}	vi^{33}	ŋɯ^{33}?
本	DEM	CL	INT.who	POSS	COP

こ/あの本はだれのですか？

(2)

tsho^{33}	**tshɿ^{44}/a^{33}dʑɿ^{44}**	ma^{33}	ɕɛ^{55}	mu^{33}	ma^{33}	ŋɯ^{33}?
人	DEM	CL	INT.what	する	CL	COP

この/あの人はなにをしている人ですか？

---

[3] 指示詞について、研究者によって取り扱う範囲が異なる：英語の this/these や that/these に相当するものを「指示詞」と認める場合（田中ほか　編 1987: pp 155-156、長屋 2015: 96 など）もあれば、here や there に相当する場所を指示する直示的意味を持つ語も含む場合（Diessel　1999、陳　2009 など）もある。便宜上のため、本発表では、前者を「狭義的定義」と称し、後者を「広義的定義」と称することにする。

[4] 陳ほか（1985）を除き、ほかの先行研究もすべて「thi^{55}」と「a^{33}di^{55}」しか記述していない。

2.2 場所

場所を指示する場合は、少し複雑である。基本的な指示詞 tshɿ^{33}、a^{33}dʑɿ^{44} も名詞 tɕo^{21} [5]または類別詞 ga^{55} を後ろに付加して用いられうる[6]し、専用の場所指示詞 thi^{55}、a^{33}di^{55}、a^{33}di^{33}、o^{21}a^{33}di^{33} も用いられている。tshɿ^{44}、a^{33}dʑɿ^{44} が名詞の tɕo^{21} に続けられる場合は、常に指で指し示すのジェスチャーが要求される。単純に物理的な距離を表すよりは、指が指す方向で「内側」と「外側」を指すと言った方が妥当だろう。垂直に指す場合は下向きが「内側」となり、話し手（指示中心）の近方をさすことになるのに対し、上向きが「外側」となり、結局遠方を指すことになる。水平で指す場合は、反時計回り方向が「内側」となり、tshɿ^{21}tɕo^{21} を使うが、時計回りの方向が「外側」になり、a^{33}tɕo^{21} が用いられる。[7]

(3) dɛ^{33} **tshɿ^{21}/a^{33}tɕo^{21}** tɕhɿ^{21} ta^{33}
COV.prepare DEM 置く STP
こ/あの辺において。

「tɕo^{21}」が後続する場合に比べ、類別詞「ga^{55}」が後続する場合は、具体的な場所を指示することが多い。

(4) **tshɿ^{44}/a^{33}dʑɿ^{44}ga^{55}** ta^{44} tsho^{33} a^{44}ɳo^{44}.
DEM FOC 人 多い
こっち/あっちの方が人が多い。

この場合、専用の指示詞 thi^{55}、a^{33}di^{55} と交換できる場合も多いが、具体的な異同点に関しては、今後の課題とする。

専用的場所指示詞について、すぐに到達できる範囲を指示する場合（例えば、室内）とすぐに到達できない範囲を指示する場合（例えば、室外で相当遠い所を指す）の二つの用法に分けられる。前者の場合においては単独の、または後置詞 ko^{33} が後続した thi^{55}、a^{33}di^{55} が用いられている。この二つの指示詞は、音韻的に接頭辞「a^{33}」の有無と、語根の子音の無声・有声、有気・無気で対立している。それは基本的な指示詞 tshɿ^{33}、a^{33}dʑɿ^{44} と一致している。

(5) nɯ^{33} **thi^{55}/a^{33}di^{55}** ɳi^{33} ta^{33} ŋa^{44} la^{33}hɯ^{44} ta^{33}.
2S DEM 座る STP 1SG 待つ STP
ここ/あそこに座って待って。

すぐに到達できない場所を指示する場合は thi^{55}、a^{33}di^{55}、a^{33}di^{33} と o^{21}a^{33}di^{33} の四つとも用いられ、それぞれ指示の中心の近く、遠く、もっと遠く、極めて遠くの場所を指し示す。いずれも方位詞（例えば、bo^{21}（前方）、ɣa^{44}（後方）、ha^{55}（上）など）の後続が義務的である。a^{33}di^{33} と o^{21}a^{33}di^{33} は両方とも a^{33}di^{55} から派生されたと考えられる: a^{33}di^{33} は a^{33}di^{55} から/55/ から /33/の変調を経て形成され、o^{21}a^{33}di^{33} はさらに a^{33}di^{33} の前に o^{21} を付加して形成されたと考えられる。

(6) ŋa^{33} **thi^{55}/a^{33}di^{55}/ a^{33}di^{33} /o^{21}a^{33}di^{33}** ha^{55} a^{44}lʐ^{44} a^{33}dʑɿ^{44} gɯ^{44} kho^{55}n̥o^{21}
1SG DEM 上 山羊 DEM CL 追い返す
la^{33} mo^{33}

---

[5] 胡（2002: 257）を参照。
[6] 遠称の指示詞 a^{33}dʑɿ^{44} が名詞 tɕo^{21} に続けられる場合、dʑɿ^{44} が脱落して、a^{33}tɕo^{21} になる。
[7] 従って、左利きの場合は逆になる可能性が高い、その点については更なる考察が必要がある。

くる　SFP
この/その/あの/あの（もっと遠い）上の山羊を追い返してこい。

2.3 様態や程度

先行研究では、基本的な指示詞 tshɿ^{44} と a^{33}dʑɿ^{44} の両方とも性質や様態を指示することが可能と述べているが、鉄匠村のノス彝語では、近称の「tshɿ^{44}」[8]や「ɕi^{21}」だけが可能であり、遠称の「a^{33}dʑɿ^{44}」は用いられない。

(7)	ŋa^{33}	**ɕi^{21}/ tshɿ^{21}/*a^{33}dʑɿ^{44}**	mu^{33}	dʑi^{44}	su^{33}	hɛ^{33}vu̱^{33}
	1S	DEM	ADVZ	なる	NOMZ	好き

私はこの/*そのような物が好き。

(8)	hɯ^{33}	**ɕi^{21}/tshɿ^{21}/*a^{33}dʑɿ^{44}**	ʂo^{44}	tɕi^{33}	nɯ^{33}	mo^{33}	ndʑo^{44}	ʑi^{21}da^{21}？
	魚	DEM	長い	CL	2S	見る	EXP	INT

こんなに長い魚を見たことある？

ɕi^{21} と tshɿ^{21} はどちらも「目の前にあるもののような（に）」という意味を表し、置き換えられる場合が多いが、違いもある。両者の異同点に関しては、今後の課題とする。

2.4 時間

基本的な指示詞 tshɿ^{44}、a^{33}dʑɿ^{44} は名詞 thɯ^{33} や類別詞の lɔ^{33} が後続して時間を指示することができる。ただし、この場合、指示の中心が発話時ではなく、話題となっている事件が起こっている時になる。換言すれば、この場合は外部照応的機能を持たず、内部照応的機能しか持たない。そして、名詞 thɯ^{33} が後続する場合は幅のある時間帯を指示するのに対し、類別詞の lɔ^{33} が後続する場合は時点のことをさしている。

(9)	**tshɿ^{21}**	thɯ^{33}ko^{33} [9]	nɯ^{33},	tsho^{33}	mu^{33}	bo^{33}	sa^{55}	o^{44}.
	DEM	時	TOP	人	QUANT	去る	EXH	PFT

その時、全ての人が去っていた。

(10)	**a^{33}dʑɿ^{44}**	thɯ^{33}ko^{33}	nɯ^{33}	ɕɛ^{55}	mu^{33}	ɳɔ^{33}?
	DEM	時	2SG	INT.what	する	PROG

あの時、あなたは何をしている？

時間を指示する用法は tshɿ^{21} と a^{33}dʑɿ^{44} の外部照応的用法の一つであるため、詳細な使い分けは次節で討論する。

なお、外部照応的に指示する表現として、a^{21}mu^{33} （今）、a^{21}mu^{55}si^{21}（先ほど）、i^{21}si^{55}（前（当日以内）、i^{21}si^{33}（だいぶ前（当日以内））などがあるが、それらの語彙が指示詞中の範疇に入れられるかどうかについてはさらなる考察が必要であり、今後の課題としたい。

3. 指示詞における内部照応的用法

内部照応的用法は、前方照応的用法（anaphoric）、談話指示 (discourse deictic)と認識用法 (recognitional) の三つに分けられる（Diessel 1999:6）。鉄匠村のノス彝語において、tshɿ^{21} と ɕi^{21} だけが談話指示に用いら

---

[8] 「tshɿ^{44}」が様態や程度などを指示する場合、声調が/44/ から/21/に交替する必要がある。

[9] ko^{33} は恐らく所格助詞の ko^{33} からきたものであり、常に名詞 thɯ^{33} と共起し、時間を表す場合は単独で使われないので、ここでは、便宜上にため、一つの語と扱う。

れ、a^{33}dʐɿ^{44}だけが認知的用法に用いられる。この二つの用法に関してはGerner (2013)の記述と大差がないため、本節では前方照応的用法に注目し考察する。

Gerner (2013:151)はノス彝語の指示詞における前方照応的用法に関して、近称のtshɿ^{44}と遠称のa^{33}dʐɿ^{44}の両方とも用いられ、両方とも前文で不定冠詞によって新たに導入された指示対象を主要な談話のトピックとして確立すると述べている。鉄匠村のノス彝語の場合、近称のtshɿ^{44}だけが主要な談話のトピックを確立する機能を持っている。つまり、トピック標識li^{33}やnɯ^{33}と共起する場合は、tshɿ^{44}だけが使用可能となっている。

(11)	a^{21}hɛ^{55}mo^{21},	tsho^{33}	zɯ^{33}ti^{33}ʂɔ^{33}fu^{55}	m̥i^{33}	ɕi^{21}	ma^{33}	dʑo^{33},	tsho^{33}
	昔	人	（人名）	名前をする	DEM	CL	いる	人
	tshɿ^{44}/*a^{33}dʐɿ^{44}	ma^{33}	nɯ^{33}……					
	DEM	CL	TOP					

昔、ゼディソフという人がいた、その人は……　<𞸀𞸁𞸂𞸃>

一方、a^{33}dʐɿ^{44}も普通に前文に現れた指示対象を照応する機能を持っているが、主に次の二つの場合で用いられる：（i）話題が転換した場合、前の話題に登場した指示対象（主要なトピックであったか否かに関わらず）を再び言及する際は、a^{33}dʐɿ^{44}だけが使用可能となる；（ii）ある指示対象が登場しているが、その指示対象が談話の中心ではない。

(12)	thɯ^{21}ʑɿ^{33}	a^{21}ndi^{33}hi^{44}	nɯ^{33}	hi^{21}	***tshɿ^{44}/a^{33}dʐɿ^{44}**	bu^{55}	ɕɛ^{55}
	本	昨日	2SG	言う	DEM	CL	INT.what
	m̥i^{33}	bu^{55}	ŋɯ^{33}	di^{55}	a^{44}？		
	名前をする	CL	COP	QUOT	SFP		

昨日あなたが言ったあの本はなんと言う本でしたっけ？

(13)	si^{33}tɕhɿ^{44}	mu^{33}ka^{55}	zo^{44}ŋgo^{33}	la^{33}	ko^{33}nɯ^{33},	ga^{21}mo^{21}	ko^{33}	ta^{33}
	夜	ムガ	下校	くる	SENT.TOP	道	LOC	COV
	tsho^{44}	ma^{33}	dʑi^{33},	tsho^{33}	***tshɿ^{44}/a^{33}dʐɿ^{44}**	ma^{33}	ko^{33}	
	人	CL	あう	人	DEM	CL	3SG.ANA	

tɕo^{44}	“a^{44}ʑi^{33},	nɯ^{33}	kha^{55}	bo^{33}”	di^{44}	ko^{33}nɯ^{33},
に対して	子供	2SG	INT.where	行く	QUOT	SENT.TOP
mu^{33}ka^{55}	tshɿ^{33}	kṵ^{33}……				
ムガ	3SG	驚かす				

夜、ムガが下校して帰った時、道である人にあって、その人が彼に“坊や、どこに行くの”と聞いたら、ムガは驚かされて・・・。

（12）において、指示詞の指示対象となっている「本」は、昨日言及したものであり、発話当時での話題ではなかった。その場合、近称のtshɿ^{44}は用いられず、遠称のa^{33}dʐɿ^{44}だけが使用可能となっている。（13）においては、指示対象「人」が前文で不定冠詞に相当する単独の類別詞に導入されているが、話題の中心はムガであり、その新たに導入された「人」ではない。よって、その場合においても、近称のtshɿ^{44}は用いられず、遠称のa^{33}dʐɿ^{44}のみが用いられうる。

なお、基本的な指示詞tshɿ^{44}とa^{33}dʐɿ^{44}だけではなく、場所指示詞のa^{33}di^{55}も前方照応的機能を持つ。

(14) a. a^{44}mo^{33}, ŋa^{33} a^{44}phu^{33} du^{33} bo^{33} mi^{44}
お母さん 1SG 祖父 ～の家 いく PROS.ILL
お母さん、おじいちゃんの家に行くよ。
b. nɯ^{33} **a^{33}di^{55}** li^{33} nɯ^{44} ɳɔ^{44}ɕɛ^{33} mu^{33} a^{44}phu^{33}a^{33}ma^{55}
2SG DEM 行く TOP ちゃんと ADVZ 祖父母
do^{21}mu^{33} ma^{21}.
話を聞く IMP
あそこに行ったら、ちゃんとおじいちゃんおばあちゃんの話を聞くね。

4. 場所指示詞における非典型的用法

指示詞は主に対象物や場所に聞き手の注意を向けるために使用される（多くの場合、指差しのジェスチャーと組み合わせて）(Diessel 1999: 2). しかし、ノス彝語の場合、場所指示詞に方位詞が後続した場合には、さらに固有名詞（具体的地名）が後続して、話し手の主観的判断や強調を表す用法もある。この用法では、具体的地名は常に見えないところであり、話し手と聞き手との間で情報（例えば、具体的位置）を共有していることが前提となるため、非典型的用法と言える。この場合は、指示詞が具体的指示範囲を変える機能は持たないが、距離的意味はまだ残っている。つまり、同じ場所を指示しても、話し手の態度や文脈によって四つの指示詞とも用いられうる場合があるが、異なる指示詞の使用によって話し手が指示の中心から指示対象までのその距離に対して、異なる主観的判断、態度などを表すことが可能である。

(15) **thi^{55}/a^{33}di^{55}/a^{33}di^{33}/o^{21}a^{33}di^{33}** dʑɿ^{21} nɔ^{33}ʑɿ^{33} bu^{44}ko^{33} ta^{33} ŋgo^{55}n̥o^{21} la^{33}.
DEM 下 雅礱江 川辺 COV 追い返す くる
こ/あの/あの（とても遠い）/あの（きわめて遠い）下の雅礱江の川辺から追い返してきた。

(15) において、同じく雅礱江の川辺を指示しているが、近称の thi^{55}dʑɿ^{21} から、最遠称の o^{21}a^{33}di^{33}dʑɿ^{21} まで、四つの指示詞とも用いられうる。その文はどっちも「雅礱江の川辺から（人や家畜など）を追い返してきた」という事柄を述べている、しかし、話し手が聞き手に伝えた情報量はそれぞれ違う。もし、「雅礱江の川辺」は話し手から 2 キロぐらいあるところだとしたら、普段は遠称の a^{33}di^{55}dʑɿ^{21} を使うのが一般的であるが、もし話し手が近称の thi^{55}dʑɿ^{21} を使うと、話し手がその 2 キロぐらいの距離が短くて、そこから（人や家畜）を追い返してきたことはあんまり辛くないという気持ちを表している。それに対し、もっと遠い所を指示する a^{33}di^{33} を使うと、その距離は遠くて、そこから（人や家畜）を追い返してきたことは辛かったという気持ちを表している。また、最遠称の o^{21}a^{33}di^{33}dʑɿ^{21} を使うと話し手は、その距離が非常に遠くて、そこから（人や家畜）を追い返してきたことは非常に辛かったという気持ちを表している。

5. 結論

本発表では、鉄匠村で話されるノス彝語の指示詞について考察した。鉄匠村のノス彝語においては thi^{55}、a^{33}di^{55}、a^{33}di^{33}、o^{21}a^{33}di^{33} という四つの場所指示詞がある。thi^{55} は近方を指示するのに対し、後者の三つは a^{33}di^{55}＜a^{33}di^{33}＜o^{21}a^{33}di^{33} の順に遠方を指示する。そして、物や人、時間を指示する場合は、近称と遠称の二系列で対立するのに対し、様態や程度を指示する場合は近称の tshɿ^{21} や ɕi^{21} だけが使用可能である。

場所を指示する場合は、基本的な指示詞 tshɿ^{44}、a^{33}dʑɿ^{44} に名詞 tɕo^{44} が後接して用いられるとき、単純に距離の近さと遠さを指示するのではなく、「内側」と「外側」を指示すると理解した方がより妥当である。専用的場所指示詞によって指示される場合、「すぐに到達できるかどうか」という指標によって２種の条件に分けられる。すぐに到達しやすい場所（例えば、室内）を指示する場合は、単独で、または後置詞の ko^{33} に続けられた thi^{55}、a^{33}di^{55} が対応し、近称と遠称の２系列で対立している。一方、すぐに到達しにくい場所

（室外で相当遠い所）を指示する場合では、方位詞に続けられた thi^{55}、$a^{33}di^{55}$、$a^{33}di^{33}$、$o^{21}a^{33}di^{55}$ の四つの指示詞が対応する。距離的に thi^{55} は近方を指示していて、後ろの三つは $a^{33}di^{55}$＜$a^{33}di^{33}$＜$o^{21}a^{33}di^{55}$ という順に遠方を指示する。

なお、場所指示詞の方位詞が後続する用法においては、さらに具体的地名に後続させる場合もあり、その場合は主に話し手指示の中心から指示対象までの距離に対する主観的判断、または態度や強調を表す。

略語：

1: first person; 2: second person; ADVZ: adverbializer; ANA: anaphor; CL: classifier; COP: copula; COV: coverb; DEM: demonstrative; EXH: exhaustion particle; EXP: experiential; FOC: focus; IMP: imperative; INT: interrogative; ILL: illocutionary; PFT: perfective; POSS: possessive; PROG: progressive; PROS: prospective; QUOT: quotative; SENT: sentence; SFP: sentence final particle; STP: stative perfective; TOP: topic.

参考文献:

陳康・巫達 1998. 『彝語語法：諾蘇話』北京：中央民族大学出版社

陳士林・辺仕明・李秀清 1985 『彝語簡志』 北京：民族出版社

陳玉潔　2009 『漢語指示詞的類型学研究』北京：中国社会科学出版社

儲沢祥・鄧曇華 2003. 「指示代詞的類型和分類」『当代語言学』2003 年第 4 期

胡素華　2002 『彝語結構助詞研究』北京：民族出版社

長屋尚典　2015「語類」『明解言語学辞典』（斎藤純男、田口善久、西村義樹　編）東京：三省堂

劉丹青・劉海燕 2005. 「崇明島方言的指示詞—繁複的系統及其背後的語言共性」『方言』2005 年第 2 期:97−108

田中春美、樋口時弘、家村睦夫、五十嵐康男、倉又浩一、中村完、下宮忠雄、田中幸子　編集　1987 『現代言語学辞典』東京：成美堂

Diessel, Holger 1999. *Demonstratives: Form, Function and Grammaticalization*. Amsterrdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Gerner, Matthias 2013. *A grammar of Nuosu.* Berlin: Mouton de Gruyter